

「白地に鮮やかなコバルトブルーの花模様」

これは、この作文課題を書こうとしていた時にふと目に留まった鍋敷きタイルの特徴だ。青一色で描き上げられた花々は、一見すると簡略化された図案のように見えるが、じっくり眺めてみるととても緻密で繊細に描かれていて、静かで落ち着いているけれど同時に華やかさもそなえているように感じられる。私は鍋敷きを見ながら、「なぜ、たった一色の青色だけでこのような花模様を描いたのだろうか」と疑問に思った。そして、「この疑問に答えてくれるヒントはないだろうか」と思った私は、鍋敷きの裏を見た。すると手がかりになりそうな情報がいくつかあった。第一の手がかりは、“TRADITIONAL TURKISH CERAMIC ART OF THE 16th CENTURY”という文であり、第二の手がかりは“IZNIC”という単語である。

第一の手がかりとして挙げた英文は「16世紀のトルコの伝統的な陶芸」と訳すことが出来る。つまり、わが家にある鍋敷きは、16世紀のトルコ、つまりオスマン帝国時代に製作された伝統工芸品と同じ文様で描かれているものだ、とわかる。第二のてがかり“IZNIC”（以下イズニックと記す）は何のことだかわからなかったもので、タイルの歴史に関する本で調べてみた。すると、“イズニック”とはトルコのブルサ県に位置する地名である事が分かった。そして、さらに調べていくと、イズニック周辺の伝統工芸品は「イズニックタイル」と呼ばれる焼き物であることも知った。「イズニックタイル」は幾何学模様や植物などをモチーフにしたものが多く、16世紀半ばまでは紺や青を基調としていたらしい。これらのことから私が「綺麗だな」と思いながら手にしている鍋敷きは、16世紀オスマン帝国支配下のイズニックという場所で製作された焼き物をモデルとするトルコの伝統工芸品であることが分かった。

しかし、鍋敷きの裏に記されたいくつかの手掛かりからえた情報だけでは「なぜ青一色で花文様を描いたのか」という疑問に答えることはできない。今回読んだ『図説イスタンブル歴史散歩』（鈴木董著、河出書房新社、1993年）やその他の資料を参考にすると、イズニックタイルを用いた代表的な建築物として「ブルーモスク」と呼ばれるものがあることを知った。

「ブルーモスク」は通称で、正式な名称は「スルタン・アフメット・ジャーミー」である。スルタンとは皇帝を意味し、ジャーミーはモスクを意味するので、訳してみれば「皇帝アフメット・モスク」となるのだろう。本を読み進めていくと、通称「ブルーモスク」はオスマン帝国第14代皇帝アフメット1世（在位1603～17年）が建立させたモスクであることが分かった。設計は宮廷建築家のメフメト・アーという人物であり、1609年に着工され1616年に完成している。中央ドームの半径は約27.5mにおよぶので、この空間だけで25mプールがすっぽり入ってしまうほどの大きさだ。中央ドームをはじめモスクの内部は数万枚のイズニック製青色装飾タイル、つまり「イズニックタイル」で飾られ、さらにステンドグラスもほどこされ、青色に輝いているように見えるので「ブルーモスク」と呼ばれるようになったのだ。

私は、手元にある鍋敷きを見ながら、これが数万枚敷きつめられている中央ドームに入ったところを想像してみた。その大きさだけでも圧倒されるだろうが、全面が白地に青色文様

の装飾で統一された様子は言葉で言い表せないほど美しいに違いない。大きな力を感じさせる建物に統一感のある色調は、祈りのために訪れる信者を感動させ、祈る気持ちを一気に高めるのではないだろうか。

ところで、「イズニックタイル」を調べた時に、青色の他に緑色や紺色、そして赤色も使われていたことが分かった。それではなぜ、モスクを飾るためのタイルは青色で統一されたのだろうか。その他の色でも、一色のみを用いて統一感を出せば同じような効果はえられたはずである。とすると、「モスクを飾るためになぜ青色が選ばれたのか」という次の疑問がわいてきた。青色には何か宗教的な意味合いがあるのだろうか。それとも、ただ単純に、当時は青色以外に大量のタイルを焼く技術がなかったのだろうか。これらの疑問には、「色彩と信仰の関係」について調べたり、「タイル製造技術の歴史」について理解する必要がある。

今回の作文課題を通して、最初の疑問として挙げた「なぜ青色だけで花文様を描いたのか」については「ブルーモスク」を例にして「色調を統一することの効果」という一つの答えにたどりつけたが、「なぜ青色なのか」というあらたな疑問を解く手がかりはまだえられていない。伝統工芸品として継承される技術やスタイルに関心を持ち、次の本を読んでみようと思う。